

私 の 工 夫

『高質な学力の養成』のための
思考力・判断力・表現力を養う
日本の伝統音楽を扱った芸術科(音楽)の取組

県立倉敷青陵高等学校

主幹教諭 金井 庸記



1 はじめに

倉敷青陵高等学校はこれまでに「主体的・対話的で深い学び」の実現に向けた授業改善を重ねてきた。今年度は、「高質な学力の養成」のための思考力・判断力・表現力を養う」をテーマに掲げており、学習内容を主体的に自分の問題として捉え、自分の考えを表現できる場を設定する研究を進めている。芸術科(音楽)は、岡山大学の教員を招聘し、協同学習の理論や学習指導要領の趣旨を学び、「高質な学力養成のための公開授業」で授業づくりの基盤を確認してきた。

今回の取組は、日本の伝統音楽とくに和楽器の種類と特徴をふまえた上で、歌舞伎音楽の内容を価値あるものとして、生徒自らの感

性によって確認できるまで主体的に聴き返し、生徒が三味線音楽のよさや美しさについて考える学習である。他者と伝え合う対話的な活動を通して生徒が根拠ある評価を積み重ねた内容の一部を紹介する。

2 芸術科(音楽)の取組

表現及び鑑賞の学習活動において共通して必要となる資質・能力を育てるためには、生徒が知覚したことと感受したことの関わりについて深く考えることが求められる。「深い学び」の鍵として、学習活動では「見方・考え方」を働かせることが重要になる。生徒にどのような視点で物事を捉え、どのような考え方で思考させていくのか研究を進めた。

(1) 「題材と教材」

日本の伝統音楽を学ぶ教材として、能「道成寺」、歌舞伎「京鹿子娘道成寺」を扱う学習活動では、生徒が和楽器の特徴を捉えることと伝統音楽のよさや美しさをまとめることができ、研究を進めるとともにその成果が期待できる。

題材名

「歌舞伎音楽の鑑賞を通して、日本の伝統音楽のよさを味わおう」

学習目標

「三味線音楽について語り合おう」

教材曲

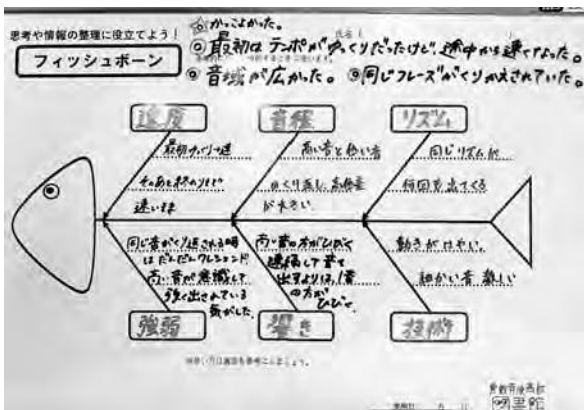
「チンチリレンの合方」
「歌舞伎「京鹿子娘道成寺」」

(2) 「知覚」

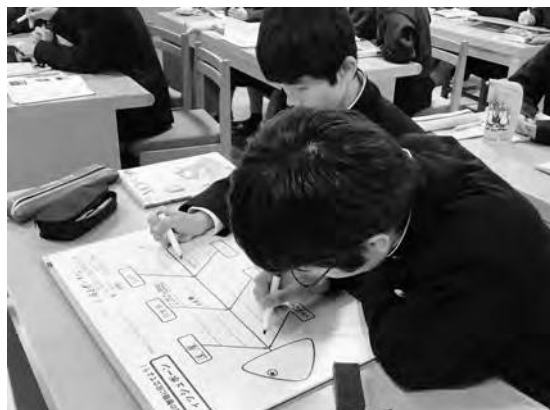
音楽を形づくっている要素を手がかりに、三味線音楽について「まなボード」を活用しながら生徒は他者と対話を通して要素を確認し、その変化についてまとめる。

(3) 「感受」と「思考の交流」

音楽を形づくっている要素とその変化を知覚した後、生み出された三味線音楽のよさや美しさ、特質や雰囲気など感受したことに



要素とその変化をまとめたシート



まなボードを活用して思考を書き出す生徒

いて根拠をもって主体的・対話的にグループを越えて他者と思考の交流をする。



まとめたシートを他者へ発表する生徒

(4) 「批評」

生徒は、他者の意見をふまえて、三味線音楽を評価しながら、再度三味線音楽のよさや美しさを自ら味わって聴き、自分にとっての三味線音楽の意味や価値を記述する。

(5) 「発表」

三味線音楽のよさや美しさを根拠をもって他者に語る。

(6) 「成果」

生徒は三味線音楽の特徴について自分にとっての意味や価値を具体的に記述しており、積極的に発

言できていた。また、その根拠についても理由を明らかにしながら具体的に説明できていた。生徒が主体的・対話的な活動を通してより深く三味線音楽を理解することで、音の本質に迫り、その音楽は生徒自身の音楽となっていた。教師は生徒が聴き取った内容をワークシートに表現（記述）できていることを確認した。また、学習活動の中で生徒が「自分や社会にとっての音楽の意味や価値」、「音楽表現の共通性や固有性」などについて考えることで、生活や社会の音や音楽の働き、音楽文化について

★三味線音楽について、よさ、美しさなどを語ろう。

生活の中でよく慣れ親しんでいる和音の組み合わせを使って演奏していることが、安心させるような心地よい気分をさせる。1音1音の音の響きが強くなり、強いインパクトを与えると同時に、少しセリフさや寂しさも表現できる。メロディーとリズムが互いに影響し合っており、リズムの変化や強弱の変化からメロディーから感じる感情が変化可能。
かけ合いや三味線奏の表現技法によって三味線の音色の響きや和音が美しく演奏されている。外国の音楽にはない、包みこむような心のしみじみ響くものがある。また、伝統音楽として日本の時代を感じられるものがある。

生徒の批評文

ての関心や理解を深め、それらを尊重する態度を育てることができた。



教師の指導場面

3 まとめ

生徒は「答え」を探してしまうが、芸術科（音楽）の学習過程では、わからない（答えがない）ことと、または答えが無数にあること存在を受け入れることで多様である見方・考え方の幅を広げながら、問い続けることの大切さ、わからないから論じ合う楽しさ、その瞬間に生じる喜びなどを味わう活動を展開できる。

生徒は自分の世界だけでは視野が広がらない。人や書籍など他者の世界と関わることで、自身における思いが深まり、それが生徒自身を強くする。授業では、生徒の学習活動に他者と関わる形態で二人以上の対話的な場面を多く取り入れている。現在、生徒の主体的な活動は新たな創造的な成果を生み始めている。

歌舞伎音楽の長唄を聴き、生徒は和楽器や日本の伝統音楽の既習経験から次のように長唄のよさ・美しさをまとめた。

長唄は演技だけでは伝えきれない情景や心情を伝えるものだと思う。しかし、それは明確なものではなく、聴く人それぞれで解釈が変わるものであって、そのある意味での不確かさを「美」と捉えた日本人が生み出したものが長唄だったのだと思う。

引き続き、イメージしたり創作したりする力が多様な到達点へ向かうことができるよう、思考力・判断力・表現力を養う学習活動を推進する中で、生徒に批判的な思考力や批評する楽しさ、問題を解決に導く力や今までにないものを創造する力を育んでいきたい。